



環境省 北海道環境パートナーシップオフィス [EPO北海道]

〒060-0807 札幌市北区北7条西5丁目5番 札幌千代田ビル3階

TEL.011-707-7060 FAX.011-707-7061

URL ● <http://www.epohok.jp/>

EPO北海道とは、**環境省北海道地方環境事務所**と**財団法人北海道環境財団**が協働して運営するプロジェクトで、北海道での持続可能な社会の実現に向けて環境保全活動を促進する基盤づくりや、政策コミュニケーション等に取り組んでいます。

この報告書は再生紙を使用しています。



この印刷物は地球にやさしい
植物性大豆油インキを使用しています。



つながるためのキーワード

ESD

とは…

つながるためのキーワード

持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development) の略。

より良い未来をつくるために、

環境・人権・平和・ジェンダー・国際協力・多文化共生・福祉など

様々なテーマに取り組む教育活動をつなぐ、傘のような概念です。



はじめに

2002年に、南アフリカのヨハネスブルグサミットでの、日本のNGOと政府の共同提案によって、2005年からの10年間で、「国連持続可能な開発のための教育 (ESD) の10年」と位置づけられました。その国際的な推進をUNESCO (国連教育科学文化機関) が担うこととなり、日本政府も2006年3月に「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画をまとめています。

地球温暖化や酸性雨などに象徴される環境問題、人権侵害や異文化衝突といった社会的問題、貧富格差をはじめとする経済的な問題。そして限りある資源の乱開発とそれに続く大量生産・大量消費の問題など、現代社会に生きる私たちは互いにつながりあう様々な課題に直面しています。

このような私たちを取り巻く大小様々な問題の解決には、個々の問題への対症療法的な対応ではなく、社会、経済、環境のつながりをとらえ、足元からの行動に移していくこと。そしてそれを伝え、広げていく人づくりを進めていくことが求められています。

このパンフレットは、そうしたESDの考え方や道内の事例を紹介し、広く知っていただくために作成しました。ESDは、国際的な取り組みだけを指すものではありません。私たちの暮らす地域を総合的に理解し、社会、経済、環境の全てを持続可能なものとしていくことも、ESDの目的です。「よりよい地域づくりのための教育」と言い換えてもいいでしょう。

市民、企業、学校、行政等、みなさまそれぞれの立場で、ご活動の中にESDの視点を取り入れていただくきっかけとなれば幸いです。

ESDは共通語!?



ゲスト ■ 大津 和子氏
北海道開発教育ネットワーク(D-net)代表

■ 高木 晴光氏
NPO法人ねおす理事長

■ 宮内 泰介氏
NPO法人さっぽろ自由学校「遊」共同代表

聞き手：久保田 学
財団法人北海道環境財団

国連の10年キャンペーンのひとつESD(持続可能な開発のための教育)。教育と書いてあるけれど、子どもだけに留まるものではなく、開発と書いてあるけれど土木工事のようなものだけではなく、よりよい社会をつくるために必要な気持ちや社会の仕組みをつくっていくための全てを学んでいくことがESDの根本にあります。

よりよい社会をつくりたいということは、多くの人が考えることでしょう。そこにつながることはおそらくESDにもつながります。ESDは知らないけれど、実は知っているかもしれない。ESDをやってないけど、実はやっているかもしれない。老若男女に「かもしれない」を与えるESD。そんなよく分からないキーワードに迫ります。

単独の問題はない。 そこに「ESD」の本質がある。

— ESDは、いろいろな教育活動をつなぐものと言われているわけですが、それぞれ教育活動の範囲というのはどうなっているのでしょうか?

大津> 開発教育というと、途上国の「貧困」の問題や「異文化理解」と狭くとらえることがあるけれど、私は広く考えています。途上国の貧困の問題や異文化理解だけでなく、私達の暮らしとのつながりや日本国内の問題も含めて、地球規模の問題を考えることが開発教育と、とらえています。そこにはもちろん人権の問題、環境の問題、平和の問題などいろいろな問題が含まれています。そもそも、途上国の方にとってはそれらの問題がすべてごちゃまぜにつながって

KAZUKO OHTSU



大津 和子氏

1946年、兵庫県生まれ
北海道開発教育ネットワーク(D-net)代表。
北海道教育大学札幌校教育学部教授。

国際理解教育の目標・学習領域を中心にカリキュラム枠組を構築し、各学習領域の展開事例を開発。ザンビア、タンザニア、ウガンダなどの教育政策・学校運営・授業のレベルで現地調査を実施するとともに、Education for All(万人のための教育)を達成するためのノンフォーマル教育に関しても研究を行っている。
著書に「社会科—一本のバナナから」「国際理解教育」「グローバルな総合学習の教材開発」など。

いる訳ですから、なにか1つを切り離して考えるのは無理がありますよね。

高木> 昔、「環境教育」という言葉に理論立てがされ始めたときは意味が狭かったと思う。10年ぐらいかけて少しずつ領域が広がって、「全体」という

■ ARUMITSU TAKAGI



高木 晴光氏

1954年、千葉県生まれ
NPO法人ねおす理事長。

農業関連・生活資材の貿易商社、レジャー産業に従事。1992年、北海道自然体験学校NEOSを設立。

現在は、各種、自然体験型環境プログラムの提供を中心に、「自然と人、人と人、社会と自然」の関係性をテーマに地域や人づくり、コミュニケーショントレーニングなどのワークショップも行っている。

らえ方になってきた。でも、現場で活動をしていると、いろいろなことが複合的になっているから、それは当たり前だったんですよ。広い意味を持った理論が後から出てきたときは、これまで説明し難かったことが、「そうそう、そう言いたかったんですよ！」って感じでしたね(笑)。今は結構しっくりきてますよ。

— どんなトピックを軸にモノを考えるかということですが、「つながり」があるので問題を一面的にとらえることはできないということですね。

宮内> 例えば、〇〇という場所の環境問題を調べようなんて出向いて行くときは、でもそこには「環境問題」という1つの問題があるわけではなくて、いろんな問題が複雑に絡んでいる現状がみえるわけです。かなり遠目からみてはじめて「環境問題」としてみえるようになるんですけど…。

人が生きていけばいろいろな問題があるわけで、そこには家族の問題もあれば、地域の問題、経済の問題、それこそ環境に関する問題も、いろんな問題がある。ESDとアルファベットで書かれていてとっつき難いと思うんですけど、「ある程度包括的にみんなで考えていこう!」、環境なら環境、福祉なら福祉で動いていたものを、「もうちょっと連携しながらやっていこう!」と考えるとESDの面白さだと思いますね。

— 「ESDの面白さ」という話が出ましたね。

大津> ESDというのは非常に広い概念で、何でもあり、という感じですね。だからこそ、ESDという概念を

媒介として、さまざまな教育が実は同じ方向を目指している、あるいは、関連しあっているんだということに気付くことができます。そこに、ESDの意義の一つがあると思います。よりよい社会や世界をつくっていくためには、問題のつながりを理解して行動しなければいけない。知識として暗記するだけでなく、社会に対する自分の行動に知識を結びつけていく教育が重要ですね。そこで、〇〇教育が大事だ、△△教育が大事だ、なんて縦割りなことを言い合っても限界がありますね。

高木> 昔ホリスティック教育(つながりを考え全体としてとらえる教育)ってあったよね。あれと一緒に思うんだけど、今度はESDとして出てきたね。

大津> そうそう、背景は違うけれど、一緒です。言葉を変えて繰り返し出てくる(笑)!!

あなたにも「ESD」

— それにしても「持続可能な開発のための教育」って硬いですね。特に「教育」。教育って聞くどうしても学校の授業みたいで受け身な感じがするんですよ。

宮内> ESDのEは、Education(教育)のEですが、「教育」と言うときちょっと硬いイメージがありますよね。自由学校「遊」も高木さんのところもたまたま「学校」と名乗っていますが、単純に学びの場なんですよ。知識を暗記する場所とか教えられる場所という感じじゃなくて、いろんなことをみんなで学んで考え合う場所なんですよ。幅広いことを学べる場もESDには必要だと思いますよ。

■ KOHSUKE MIYAUCHI



宮内 泰介氏

1961年、愛媛県生まれ
NPO法人さっぽろ自由学校「遊」共同代表。
北海道大学大学院文学研究科助教授。

ソロン諸島、北海道、沖縄で、環境、生活、移民の調査を行うとともに、NPO法人さっぽろ自由学校「遊」の運営スタッフとして、市民活動を続けている。
著書に「ヤシの葉のアジア学」(コモンズ)、「コモンズの社会学」(新曜社)、「環境社会学」(放送大学教育振興会)など。



—世の中には、いろいろな研修がありますか？

高木> 例えば、教員の研修は教員の人たちだけじゃないですか？ 行政の研修もそう。メニューはたくさんある。しかし、その人達だけで研修を行っている。学校の先生もいるし、行政の人もあるし、民間の人もあるようなものが必要じゃないかと思えますよ。いろいろな人がいる中で一緒に研修できるような仕組みがないと、既成概念を超えてもう一步理解を高めるのは難しいんじゃないかな。実際に、自分達NPOもわりとタコ壺化している(笑)。活動はしているけれど、私は環境、私は福祉なんてタコ壺のような縦割りになっていて、連携が難しくなっていますね。

—これは、いろいろな方々に関係するお話ですね。読者の方々も思い当たるフシがあるんじゃないかと思えますよ。でもホントに連携するって難しいですよね？

大津> 余裕がないというのが現実でしょう。

高木> お互いテンパってんですよ(笑)。何かの話の中でテンパっているという言葉がでて、「ああ、自分もテンパってるんだ」と思った。手いっぱいだったんですよ。

例えば、中間支援組織や大学なんか、いろいろ

な分野の人を混ぜた研修なんかを開催していかないと、現場屋同士の理解がもう一步進まない。みんなテンパっているから必要と思う。自由学校「遊」や北海道教育大学にも期待しています！

宮内> それは是非やりましょう！ねおすさんでもやってるでしょ？

高木> 今年のテーマはクロスです。クロスフォーラム。障害を持った人と自然体験とか、子育てをやっている人達と自然体験とか……(しばらく続く)

北海道と「ESD」

—だんだん具体的な感じになってきましたが、北海道とESDということでコメントを頂けますか？

大津> ESDという言葉キーワードにしてつながることができる。自分のやっていることはESDなんだと思ったら、じゃあ他にどんなことをやっているんだろう、とネットワークが形成されていけばいいんじゃないでしょうか。ESDを、さまざまな教育分野にかぶさる傘のような概念としてとらえるとわかりやすい。でも現実には、ESDという言葉はまだ知られていない。もっと広めていくことが必要ですね。

宮内> 北海道は広いから、意識してネットワークを作っていくことが重要な。自由学校「遊」では、

ESDとして、札幌以外で出張ワークショップみたいなことをやってきています。これは単に札幌の人間が押しかけてやるというのではなくて、すでに地域でいろいろやっている、これからやろうとしている人とお互いのネタを出し合いながらやっています。去年は何ヶ所かで行いました。帯広では、自由学校「遊」がお邪魔させていただいて、地域調査を帯広の方々やってみた。自分たちのマチで何が課題なのか、逆にどんな良いところがあるか調べてみました。外国人の方が地域の中でどのような感じで溶け込んでいるのかを調べる人がいたり、農業について調べる人がいたり、もともとそのテーマに興味がある人もない人もいて分野を超えて地域を知るキッカケになった。自由学校「遊」は、キッカケづくりのお手伝いできました。

もう一つは、アイヌ民族との関係。アイヌ民族との共生については、自由学校「遊」の当初からのテーマの1つで、毎年活動をしています。時にはアイヌの楽器を作ってみたり、時にはアイヌの人たちが抱えている政治的な問題をみんなで勉強してみたり。

大津> おっしゃるとおりアイヌのことは避けて通れないですね。D-netでも1つのグループがアイヌのことをどのように生徒に教えたらいいんだろうと、北海道でアイヌのことに取り組んでいる方の報告を

聞いたりディスカッションをしたりして、アイヌに関する教材を作っています。

—全道ネットワークとアイヌ民族の話は、やはり北海道でははずせないテーマですよね。

高木> 「自然学校」というキーワードもESDだと思います。田舎で活動しているといろいろなこと、福祉も、農業も、食も、子どもの問題も普通にある。地域活動だと思うんですけど。

担い手を育てていくには、ちっちゃな市町村はいい場だと思う。イベントを企画するのも顔が見える範囲なのでいいし、エコツアーをやるにしてもそう。実践しやすいんですよ。育つ環境が作りやすい。

—当別でも、食や農、子どもをテーマに活動しています。他にも、いろいろな地域で活動があるようですよ。

宮内> 調査で日本国内あちこちに行くことがあるのですが、どこでも、いろんなことをやっている人がいるんだと思います。市民活動でもないし、NPOでもない、いろんな人が地域をよくしていこう!、問題を解決していこう!、と活動している。それがESDなんだと思うんですよ。そんな人や地域が、ESDをテーマに実はつながっているんだと思うことが大事なんじゃないかと思えますね。行政側のお金やノウハウ、いろいろなセクターが持っているお金やネットワーク、それをどう組み合わせ、よい世の中をつくっていくかがESDのテーマでしょうね。

—本日は、ESDについていろいろお話をいただきました。ESDの本質の部分、ESDがいろいろな人に関係していそうなこと、そして北海道でのESDのテーマにも触れていただきました。何より、北海道内、道外へ「つながる」大きな可能性を秘めたキーワードだと感じました。これからもよろしくお願いします。

対談日時：2007年2月1日

とうべつ

当別からはじまる ESDプロジェクト



冬水田んぼの生きもの調査(2006年8月)

石 狩当別に事務所を置くNPO法人当別エコロジカルコミュニティ(TEC)が中心となり、当別町というフィールドを活かした、ESD当別アクションプラン作り(環境省ESD促進モデル事業)を行っています。

2002年3月に活動がスタートしたTECは、その名前にある「エコロジカルコミュニティ」を、①環境面で持続可能であり、②社会的に公正で、③自己実現の機会が保証され精神的に豊かな生活を送ることができるコミュニティと定義し、その実現に向けた教育活動の推進を私たちのミッションとしています。活動の範囲は、事務所を当別町に置いています但し限定はしていません。言い換えれば、ESDをミッションとしてスタートしたNPO法人がTECだということもできると考えています。

北海道には「環境の村」という環境教育の拠点づくりの構想があり、5年前より事業が進められています。この「環境の村」の構想は、ESDを市民サイドで進めているESD-J(NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議)の代表でもある阿部治氏(立教大学教授)が座長を務めて作成したもので、まさにそのコンセプトはESDそのものだということができます。基本構想には5つの柱があります。1)ライフスタイルの見直し。2)自然と人との共生のあり方を学ぶ。3)世代間の交流や、国際的交流。4)環境学習の指導者養成。5)「環境の村」が実践する持続可能な社会の実現に向けた取り組みの発信。実際に、持続可能な社会の実現のための教育を体験中心に行っていこうという施設です。

TECは、この「環境の村」のフィールドとなる当別町に事務所を置いていることもあり、「環境の村」でのESDの活動が当別町全体に広がり、一つの町が持続可能な社会に向かっていくための教育活動に力を注いでいます。具体的な活動としては、子ども向けのキャンプやセミナー、指導者養成、フォーラムといった事業を行い、環境教育の手法や考え方を実践しながら培っているところです。また、2004年と2005年には環境教育をテーマにした学校教育とNPO法人との連携のあり方を検討する文部科学省の研究事業に参加し、年間50時間ほどの授業を小学校・中学校・高校で行ってきました。この縁で、今でも毎年町内の学校で授業をさせていただいております。2005年には、環境省の事業として「環境学習をテーマとしたエコミュージアム構想」を実施し、当別町というフィールドのポテンシャルを見極めることができました。



先住民のクチャ作り(2006年8月)

このような5年の蓄積の上に、今年取り組んでいるESD当別プロジェクトがあります。まさに、この活動に取り組むことは、私たちTECにとってのミッションでもあるのです。また、昨年より「冬水田んぼ」をキーワードとした農業に頼らない農業や牧畜のあり方について、地元の農家さんはもちろん、企業、行政の方々と一緒に取り組みを始めました。様々な役割を持つ主体が、一つの目標を共有しながら、互いに学び合う場がこの「冬水田んぼ」での取り組みであり、私たちTECにとっての環境教育ワーキングネットでもあります。ESD当別プロジェクトはこの延長でもありますが、単なる延長ではなく、オルタナティブな教育や社会づくりを目指しています。



ヒマワリの種から作った油(2006年8月)

私たちは、単に教育を学校教育や社会教育という枠組みの中で考えるのではなく、生活の全ての場面に学びの場があると考えています。そして、そのキーワードは「リアリティー」だと考えています。学校では盛んに体験活動が行われていますが、体験そのものがリアリティーのないところで行われているものがほとんどです。それを、もう一度リアリティーのある場面、生活や地域(行政区ではない地域)に学びの場を作っていこうと考えています。そこでは、教える人と教えられる人が一方通行ではなく、ある時は教える人、ある時は教えられる人になるのです。それは、大人も子どもも関係ありません。学びというのは変わる事、変化を起こすということでもあると考えます。しかし、変わるということは、力の必要なことです。一人ではなかなか変わりません。そこで、仲間が必要なのです。互いに分かり合った、学びのコミュニティが力になってくれます。アーネスト・カレンバックが書いた「エコトピア国」のように。

私たちはもう一度学ぶということを考え直さないといけないのかもしれない。新しい学び方のパラダイムを変えること。持続可能な社会をキーワードとした学び方の実践がESDの目的ではないかと考えています。何かを学ぶのではなく、学び方を学ぶ。ここからESDが始まるように思います。

(執筆：山本幹彦)

連絡先

NPO法人 当別エコロジカルコミュニティ
代表理事/山本 幹彦
〒061-0206 北海道石狩郡当別町川下754
TEL: 0133-22-4305 FAX: 0133-22-2263
URL ● http://www.geocities.jp/tectec_ee/

さっぽろ

さっぽろ自由学校「遊」における ESDへの取り組み



江別 ESD ワークショップより(2006年11月)

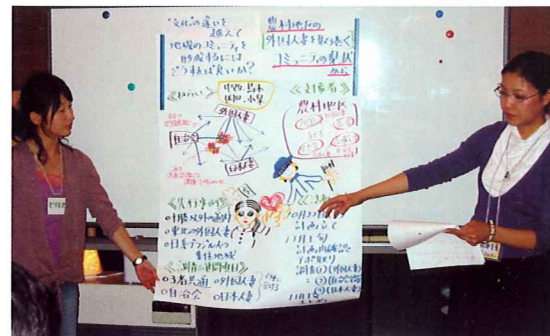
さっぽろ自由学校「遊」は、「市民がつくる市民に開かれたオルタナティブな学びの場」として札幌を拠点に活動している市民活動団体(NPO)です。具体的には、環境・開発・人権・平和・多文化共生などをテーマに年間30コース程度の連続講座を開催している他、映画上映会や講演会などの公開イベントの開催、国内外へのスタディツアーの実施、ブックレットの出版など様々な形で市民の教育・学習活動を行っています。

当団体では、4年ほど前からいくつかのねらいをもって、ESDへの取り組みをすすめてきました。「北海道という地域性に根ざした学習活動を広める」ということを柱に、大きく以下の2つのアプローチによる活動を行っています。

ESDへのアプローチ① 地域づくりのための学び

一つは、道内各地でのワークショップの開催です。2003年の夏に行った、2回にわたるESDファシリテーター研修合宿の後、地元NPOなどと協力して道内各地でESDワークショップを開催してきました。過去4年間に道内10地域で延べ15回のワークショップを行っています。初期のワークショップは、南北格差や環境問題などへの気づきを目的としたものですが、次第に各地域に固有の課題を出し合い、これからの「持続可能な地域づくり」のビジョンを構想していくようなものとなっていきました。

2006年度には、帯広・函館・江別の3地域で、参加者が実際に地域の現状を調べ発表しあう参加型



帯広 ESD ワークショップより(2006年10月)

の地域調査を取り入れたワークショップを行いました。調査実習を組み込んだこの取り組みは参加者にとってはハードルの高いものだったと思いますが、参加型の学びを具体的な地域づくりにつなげていくための実践として手ごたえを感じるものでした。

例えば、帯広では調査の一つとして家畜ふん尿を利用してメタンガスを発生させエネルギーとして利用する「バイオガスプラント」を導入した牧場の調査が行われ、こうしたプラントを普及させるための手立てを引き続き調査していくことが提案されました。また、函館では、参加者の一人の発案による「フットパス」事業が調査という段階から既に事業の実現に向けて動き出しています。江別では、「映像を使った地域CMづくり」という他の地域とは異なる表現方法が取られましたが、映像作品をつくるという共同作業の中で、地域に古くから暮らす年配の方々と大学生などとの間に、世代を超えた交流と新たなつながりが生み出されました。

ESDへのアプローチ② アイヌ民族との共生のための学び

ESDを行う上でのもう一つのアプローチは、北海道という地域の未来を考える上で欠かすことのできない「アイヌ民族との共生に向けての学び」を広めていくということです。「アイヌ民族との共生」という課題は、私たちがこれまで常に重視していたテーマではありますが、ESDという概念を手がかりにアイヌ民族との協働をより意識した取り組みにチャレンジしています。その一つが、アイヌ民族の文化や活動を訪ねるフィールドツアーの開催です。

過去4年間に、伊達・登別、静内・浦河、平取町二風谷、旭川、札幌で、地元のアイヌ民族の方々の

協力を得てフィールドツアーを開催しました。そして、2006年には世界遺産に登録された知床半島を訪れ、アイヌ民族がガイド役をつとめる先住民族エコツアーを実現しました。また、2005年11月には「共生への学びをつくりだす～アイヌ民族と共に歩むために～」と題して1泊2日のセミナーを行い、アイヌ民族の文化や人権、そして学校現場におけるアイヌ学習の現状などについて議論しました。このセミナーの参加者はほとんどが和人でしたが、2007年10月には、アイヌと和人の両者が平場で話し合いながら、アイヌ民族の権利回復や共生のあり方について考える合宿ワークショップを開催する予定です。

「ESDの10年」は、これまで個々に行われていた市民による小さな学習実践を、分野や地域や世代を超えてつないでいくための手がかりになるものだと思います。さっぽろ自由学校「遊」では今後、自分たちの行っているESDへの取り組みをより一般化し、広めていくために、情報発信を強化していくと共に、地域に根ざしたESDの教材化を進めていきたいと考えています。また、これまでの各地での取り組みの協力団体や参加者とのつながりを基に、道内でのESDのネットワークをつくっていかねばと思っています。

(執筆：小泉雅弘)



シレットコ先住民族エコツアー風景(2006年7月)

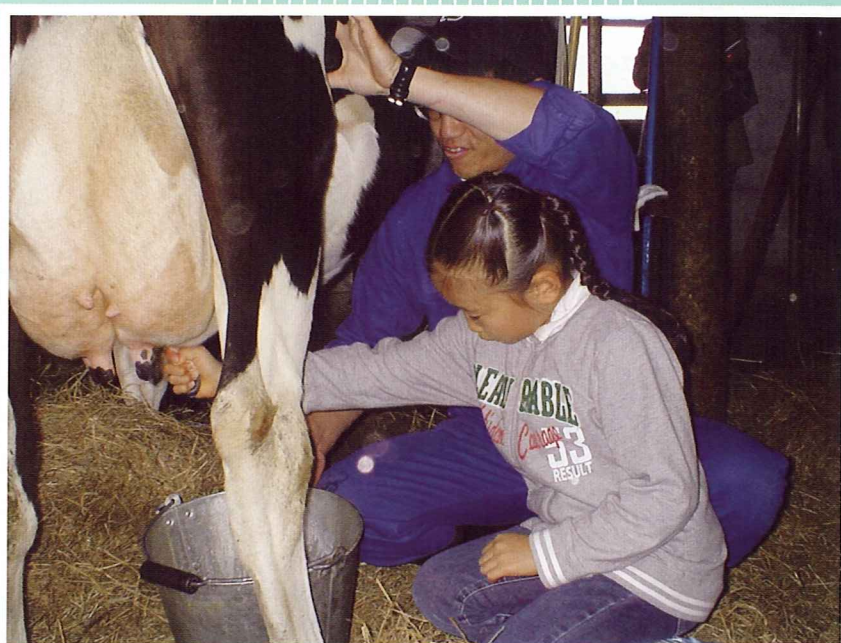
連絡先

NPO法人 さっぽろ自由学校「遊」
共同代表/宮内 泰介・徳武 篤子・林炳澤
〒060-0061 札幌市中央区南1条西5丁目
愛生館ビル207

TEL: 011-252-6752 FAX: 011-252-6751
URL: <http://sapporoyu.org/>

しべちや

地域を動かすユニークな教育 ～北海道標茶高校のESD～



乳搾り(2006年10月)

釧路湿原上流部の酪農の町、標茶町に標茶高校があります。「食、農、環境」を教育の3本柱として掲げる標茶高校の全校生徒数は343人、教師数は42人。校地面積は255haと国内有数の広さです。この広大な土地を活用した学習内容は、農業高校としての歴史を踏まえつつ、近年は総合学科として地域全体を巻き込んでその裾野を大きく広げています。地域のつながりを大事にし、地域の課題を、その地域全体で解決していくように方向づけしていくための教育が「ESD」のひとつだとすれば、標茶高校の取り組みはまさにESDでしょう。(この記事は、2007年2月5日、田中延和教頭、岸本修教諭、石井亮教諭の3名にお話を伺った内容を元に構成しています。)

「食」—現場で学ぶ

食については、釧路商業高校と釧路工業高校、そして標茶高校の3校で、地域に貢献しなら「モノづくり」を体現しようというプロジェクトが始まっています。現在、商、工、農業系の道立高校間には圏域毎に生産から販売までを実験的に研究するチームがあり、これら3校は釧路圏域の代表チームです。

このチームでは、農業系総合学科の標茶高校が地域の製造関係の業者と協力して乳加工の新製品を開発、釧路工業高校が販売用のショーケースを製作、そして、釧路商業高校が販売やモニタリングの中心となり、3校の生徒が協力して釧路市のお祭りなどで販売を行っています。これまで2回の販売実習がありましたが、「俺売ってきます!」と工業高

校の男子生徒までもが販売の楽しさや醍醐味に触れています。高校生が専門分野を超えて、食品開発や販売活動を行うことは、これまでにないものでした。

また、標茶高校では、釧路市内や標茶町内の小学生とその保護者を招いて、一緒にパンやアイスクリームを作って食べる試みも行っています。「まさにあの牛が出した乳からできたモノを食べる」ということを通じて、命や食の大切さを参加者にダイレクトに伝えるとともに、授業でそれらにかかわる生徒も同じことを学びとります。

「農」—先生は高校生

標茶高校では地域の人に農場を開放しています。「地域の人が、鍬とかスコップなんかを持ってよく出入りしていますよ」と田中教頭が語る通り、地域の人と標茶高校がフィールドを共有している格好です。豊富な農地と昔からそこで醸成されてきた素晴らしい土を活かして、地域に自分たちで作って食べる喜びを伝えたいと始まりました。

この中では、同校生徒が先生となって地元の小学生に農業を教えています。小学生と高校生が手をつないで畑に向かっていきます。そして安全に配慮しつつジャガイモの作り方を教え、収穫までを一緒に行っていきます。参加している小学生も教える高校生も、地域の方々とのコミュニケーションの中で教科書の文字では表せない沢山のことをお互いに学び合います。地域全体が標茶高校という学びの場を使うことによって、まさに農業を中心とした地域の教育が同校で創造されています。

「学校に煮炊きできる場所があればさらに良いのですが…」と岸本農場長。生産から食べるところまでの一連の流れの中での学びは、これからの日本の農業教育や食育の本来のあり方を問うものとなるかもしれません。



芋掘りの後で(2006年9月)

「環境」—Think Globally Act Locally

ラムサール条約登録湿地のひとつである釧路湿原では、現在自然再生事業が推進されています。



実験河川での水質調査(2006年9月)

過去の開発による湿原面積の減少や湿原の乾燥化等、多様な生物の生息地としての釧路湿原は数々の問題を提起しています。自然再生事業は、このような課題に対して「人と自然の共生」を目指していくものであり、多くの議論や事業が行われています。標茶高校もまた、2001年に「釧路湿原再生プロジェクト」を立ち上げ、研究活動を始めました。

同校のテーマは、「水質浄化」。町の基幹産業である酪農業や生活排水が湿原に与える影響を重要な課題としてとらえたテーマです。その取り組みが地域の産業の中で組み込まれないと本当の課題解決にはならないと、地元の企業や標茶町、そして大学等の研究機関と連携して、低コストでシンプルな浄化システムを検討しています。これまで、湿原の植物である「ヨシ」、「ガマ」、「スゲ」、「オランダガラシ」等を使った水質浄化の実験を行い、効果を実証しようとしています。生徒は自らの仮説を実証するために、研究機関に出向いたり、大学の先生の出前講義を受けたりする一方で、地元の小学生に「小学生のための環境学習の授業」を行ったり、様々な会合で研究発表しています。もちろん地域の方々への説明も生徒自ら行っています。

「教えられる」という一方通行の学習でなく、自分たちが行ったことや考えたことを伝えるという両輪をしっかりとまわし続けています。地域の課題解決の実践者でありコーディネーターでもある生徒が、世界的に貴重な釧路湿原という舞台上で「人と自然との共生」をみつめています。同校の実践にみられるような地域全体で郷土を考えるキッカケを与え続けている行動は未来をつくる行動と言えるのではないのでしょうか。

連絡先

北海道標茶高等学校

校長/小川 龍幸

〒088-2313 北海道川上郡標茶町常盤10丁目1番地

TEL: 0154-85-2001 FAX: 0154-85-2067

URL ● <http://www.shibecha-h.ed.jp/>

ESDについての主な情報源

よく分からない言葉「ESD」から、つながるためのキーワード「ESD」に変化した方、変化しそうな方、まだ分からないという方は、下記の情報源もチェックしてみてください。ESDのアプローチはあなたから!

NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J)

日本国内で持続可能な社会のための教育を広め、推進していくために、2003年6月21日に発足したネットワーク組織です。情報発信や政策提言、地域ミーティングの開催支援、国際ネットワークづくりの推進等を進めています。ESD関連パンフレットも作成しています。

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-67 コスモス青山B2階

TEL : 03-3797-7227 FAX : 03-6277-7554

URL ● <http://www.esd-j.org/>

地球環境パートナーシッププラザ (GEIC)

環境省と国際連合大学が1996年10月から協働で運営するプロジェクトで、パートナーシップによる地球環境問題の解決を目指して活動しています。

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-70 国連大学ビル1階

TEL : 03-3407-8107 FAX : 03-3407-8164

URL ● <http://www.geic.or.jp/geic/>

財団法人北海道環境財団

市民・民間の主導による自発的な環境保全活動を促進し、環境学習の機会の提供や情報交流などさまざまな活動支援を行うため、北海道の出資により設立された非営利団体です。情報交流拠点「北海道環境サポートセンター」を運営しています。

〒060-0004 札幌市中央区北4条西4丁目1番地 伊藤・加藤ビル4階

TEL : 011-218-7811 FAX : 011-218-7812

URL ● <http://www.heco-spc.or.jp/>

UNESCO (国連教育科学文化機関) の関連サイト (英語)

<http://portal.unesco.org/education/>

環境省関連サイト

<http://www.env.go.jp/policy/edu/desd.htm>

外務省関連サイト

http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/edu_10/10years_gai.html

文部科学省関連サイト

http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/jizoku/index.htm



北海道からのアプローチ